

『李賀研究』について

研究というと大袈裟だが、わたしの氣持では、研はすずりで、究はつきる、つまり、硯の水の無くなるまで、というほどの意味である。

『文選』にのせる郭璞の「江賦」に「綠苔は研上に蒙影たり」という句がある。李賀の注に、南越志に曰く、海藻は一に海苔と名づく、研石上に生ず、風土記に曰く、石渠は水苔なり、青綠色にして、みな石に生ず。通俗文に曰く、髮の亂るるを蒙影という。說文に曰く、研は滑石なり、研と硯と同じ。というから、この句は、滑らかな石の上で緑色の水草がひらひら揺れてい、といふことらしい。わたしの世すぎは決して滑らかではなかつたが、平板であつたことは確かである。その平板な人生に、なんの因果か、李賀という鬼才を見出した。川の底の平たい石に妙しくも美しい水草がたゆどつてゐるに似なくてはない。

久しく旅行などしたことがなかつた。去年の春、ふと思いついて、群馬縣の嬬恋村をたずね、浅間山の麓を輕井澤に出、そこから松本にけき、千曲川を眺めながら、中央線で歸つた。そのとき、松本で、小さな硯をひとつ買つた。朱を書るつもりだつたが、紙がかわって墨を書つてゐる。極大的の筆を揮うには役に立つまい。手紙やはがきを書くには充分である。

この雑誌は、わたしの硯がたたえる歛滴の水からつむぎ出す、李賀にまつわるいくばくかの文

字を取ることを目的とする。時には慕まぐれに友人知人の文章を招くこともあるかもしれないが、まずは無署名の、すなわちわたしの拙文だけで紙幅を満たすことになろう。発行の期も定めぬけれども、二ヶ月に一冊は出したいものと思っている。

李賀は「楊生青花繁石硯歌」で、孔子の大硯をあざけつた。わたしたるものもより端溪の神品ではない。けれどもかれは、案外、遠い石硯の幽硯の荒流を、微笑して顧みるような氣もあるのである。

昭和辛亥 幻城水子の命日

頌田憲雄

李賀集の諸本と注釋その他の

李賀の集の諸本とその簡稱を左のようになっておく。（）内は簡稱、開聯書三三をそえる。

- 1 「北宋本甲」 歌詩編四卷 景北宋本 密韻景刊宋本七種所收
- 2 「北宋本乙」 歌詩編集外詩一卷 景北宋本 四部叢刊集部所收
- 3 「宋蜀本」 李長吉文集四卷 景蜀山朱氏藏 宋蜀本 編古逸書所收（この本は中華民國五十六年一九六七年臺灣學生書局から『李長吉文集』として出版され、手に入れやすくなつた。）

4

「金刊本」 歌詩編四卷 豊常熟曾氏鐵琴銅劍樓藏金刊本 四部叢刊集部所收
 以上を基準原本とし、北宋本甲・乙を底本とする。甲と乙は版式・字體を異にし、別の本だが、甲は、目録には載せる外集を本文では缺き、乙は外集の本文だけ残存するのだから、二つはまさぐれるおそれがない。特に必要な場合のほかは、甲・乙を記さない。

5

「元刊本」 繕表集四卷外集一卷 民國十二年秀水金氏用元復古堂木景印 秀水金氏梅花

草堂影印舊本之二 學生書局本の外集はこの本を用いる。

6

「朝鮮本」 李長吉集不分卷 江山昌平坂學問所藏朝鮮活字本 この本はいま内閣文庫の

もので「宋代の古い形を伝えるものと推定される」「荒井堂。その景印を荒井氏から贈られた。」ここに記して感謝する。

7

「官板」 曹李長歌詩四卷外集一卷 宋吳正子箋注 宋劉彌翁評點 文政紀元昌平坂學

問所刊 この本は5の元刊本よりも復古堂本の舊をよく傳えているようだ。なお、わたしが「吳注」「劉評」と簡稱するときはこの本の吳氏の注・劉氏の評をさす。以下これにならう。

昌谷集四卷 明董益注 民國五十三年台北世界書局刊 李賀詩注所收
 唐李長吉詩集五卷 明徐渭・董懋策同注 蘭氏叢書所收
 歌詩編四卷集外詩一卷 明毛晉校 景汲古閣正本唐四名家集所收
 李長吉集四卷外集一卷 明董淳櫻評 清黎簡批點 宣統元年掃葉山房石印

11 10 9 3

〔曾注本〕
 〔董氏本〕
 〔毛氏本〕
 〔黃評本〕

- 昌谷集四卷集外詩一卷 清姚文燮注 一九五九年北京中華書局刊三家評注李長吉歌詩·世界書局刊李賀詩注所收 世界書局本は、中華書局本と同じ内容のものに、8の著注本を加之ただけである。以下、一本のみをあげる。
- 方扶南北本李長吉詩集四卷 清方世舉批 中華書局本所收
- 李長吉歌詩四卷外集一卷注一卷 清王琦注解 乾隆二十五年序王氏寶物樓刊
「この本は中華書局本にも收める。」
- 協律鈎元五卷 浩然本禮注 陳氏叢書所收
- 李長吉詩集四卷外集一卷 清吳兆宜評注 民國十一年刊
- 跋註李長吉詩集 漆山又四部注 昭和八年東明書院刊
- 李賀「中國詩人選集」14 荒井健注 昭和三十四年岩波書店刊
- 李賀詩集叢考奇編訂 一九五九年北京人民文學出版社刊
- 李長吉歌詩集上下 鈴木虎雄注 昭和三十六年岩波文庫
- 李賀「漢詩大系」13 番藤昭注 昭和四十二年集英社刊
- 李長吉歌詩校釋 陳弘治校注 民國五十八年台灣嘉新水泥公司文化基金會刊
左につづく六本は陳釋が校勘に用い、わたしの未見のものである。
誦芬室覆宋宣城本 北宋本甲・乙と内容的には同じものらしい。
- 小集明末葉刊本 官板と相近い本のような氣がする。
「明末葉本」

- 39 38 37 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26
 「凌刊本」 漆刊朱墨印本
 「高僧發刊本」 元刊本と相近い本のような氣がする。
 「高僧發刊本」 12と同じものだが、12は詩の本文を省略する。
 「高僧發刊本」 寧輪樓姚伶纂閱昌谷集句解定本
 「高僧發刊本」 清初姚文燮昌谷集注本
 「高僧發刊本」 次につづく七本は總集で校勘に必要なものである。
 「高僧發刊本」 楽府
 「高僧發刊本」 楽府詩集一百卷 宋郭茂倩輯 景宋刊本 中津濱涉著樂府詩集の研究所收
 「高僧發刊本」 開和四十五年汲古書院刊
 文苑英華一千卷 宋李昉等撰 敷輯 景明隆慶刻本 民國五十四年華文書局刊
 重校正唐文粹一百卷 宋姚铉輯 景明嘉靖本 四部叢刊集部所收
 唐詩紀事八十一卷 宋對南功撰 景明嘉靖本 四部叢刊集部所收
 又玄集三卷 唐韋莊輯 景江左昌平坂學問所官板本 一九五八年古典文學出版社刊
 才調集十卷 前蜀韋縠輯 景宋寫本 四部叢刊集部所收
 全唐詩九百卷 清康熙御定 揚州詩局本
 校本李賀歌詩編 崇田憲雄校 方向社近刊予定
 李賀年譜 朱自清著 清華學報第十卷第四期一九三五年十月に載せ、「文史
 論著」一九六二年香港太平書局刊などに收める。

北成文出版社刊

「これまでに李賀に関して、あるいは觸れている、わたしの文書は左の通り。ここに渾れたものがあれば、気づいた時に補う。」

2 1 李長吉 龍谷大學文學部に卒業論文として提出したもの 昭和十六年一月十一日
白玉樓中の人—李長吉をめぐって—『方向』1號（京都・方向社）昭和二十八年三月三
月。李賀が杜甫と血縁のつながることを指摘した。

2 3 李長吉詩鈔 翻譯『方向』1號。

4 白玉樓中の人『水甕』昭和二十八年六月號（東京・水甕社）

5 露滴『大乘』昭和二十八年七月號（京都・西本願寺）

6 7 筆構造化天無功—李長吉をめぐって—『方向』2號。質の天に歸する意識についてのべた。
中國の詩人の天に対する觀念とその制作との關聯を指摘するものは、當時のわたしの知る限
りでは、他になかった。のち錢鍾書『談藝錄』がこれに言及するのを知った。

昌谷詩 翻譯『方向』2號 昭和二十八年九月
褐櫻—李長吉をめぐって—『方向』3號。諸事件の意義を述べ、藝術家の遂上車注について

て考察を加えている。昭和二十九年九月二月。

夫人飛入瓊瑤臺—李長吉をめぐって—『方向』4號。批評行動としての溺酒、喪失の悲哀、天と死のメタフィジク、などについて。

離歌 翻譯 『方向』4號 昭和二十九年九月。

石破天驚廻秋雨—李太白詩にみべつて—『方向』5號 昭和三十年五月、敵視的凝視、

難解性の分析、など。

『幽夢集』中國詩 昭和三十一年七月 方向社刊 油印。李賀詩五十五篇を含む。
明月珠 翻譯 『方向』6號 昭和三十一年九月。

補想—李太白詩にみべつて—『方向』6號。文學と歴史、共感共鳴、終ったところから始まる。
歸鄉—李長吉をめぐつて—『方向』6號。李賀詩の解釈、鳥畫、聯句、韓、孟聯句と李賀の獨創聯句。

『墳墓』歌集 昭和三十一年十月 方向社刊 油印。少し李賀にふれたところがある。
『平松集』中中國詩 昭和三十三年八月 方向社刊 油印。李賀詩六篇を含む。

幽眠 翻譯 『方向』8號 昭和三十三年八月。

頌歌—李長吉をめぐつて—『方向』9號 昭和三十五年八月。
王琴一常建をめぐつて—『方向』9號。常建と李賀のかかわりについて少し觸れた。なおついでにいえば、この論文の中で、中國詩人の落日諺について論証したが、わたしの知るか

ぎり、わたしのあげた以外の根據に立ってやうに包括的に論じたものは、まだ出ていないようである。

『照花集の骨』に『詩集』昭和三十五年二月 方向社刊。少し李賀にふれた作がある。

『長歌續短歌』—李賀小記—『人文論叢』7號 昭和三十七年五月十一月 京都女子大學人文學會刊。

金銅仙人辭漢歌—李賀小記—『人文論叢』8號 昭和三十八年九月。李賀の同題の詩の序に「青龍元年」あるいは「九年」とするのは「三年」とすべきであることを考證し、法華經の非情成佛の思想が賀に投影しているであろうことを推測した。

十二月樂辭—李賀小記—『方向』10號 昭和三十九年七月。

『夢翁集』中國詩選 昭和三十九年九月 方向社刊油印。李賀詩五十三篇を含む。

『韓愈』漢詩大系II 昭和四十年一月 東京崇文社刊。ところどころで李賀にふれる。

『南の風』詩集 昭和四十一年二月 方向社刊。少し李賀にふれた作がある。

『楞伽—李賀小記』—『人文論叢』14號 昭和四十一年十二月。楞伽經と李賀とのかかわりにつき考證、かれの祖先について考證し、四世の祖を李孝逸と推定し、賀の詩法は天と死のメタフィジクに由來し、そのロゴスは楞伽に、エートスは李孝逸に歸することができるだろう、と論じた。

莫種樹—李賀小記—『方向』13號 昭和四十二年三月。李賀の同類の詩とELIZABETH

JENNINGS の "Absence" と比較した。

『王維』中國詩人選。昭和四十二年四月、集英社刊。少し李賀にふれる。

白玉樓中十四五年。『李賀』漢詩大系 13 「月報」 昭和四十二年九月 集英社刊。

夢小樓一李賀小記。『唐人衣論叢』15 號 昭和四十二年十二月、李賀の恩人、友人につき考證。貞薪一李賀小記。『人文論叢』16 號 昭和四十三年十二月、李賀の父李賀肅につき考證。

火宅『海』30 昭和四十三年五六三月 神戸・海の會刊。ほんの少し李賀にふれる。

杜序一李賀小記。『人文論叢』17 號 昭和四十四年五六十一月。杜牧の「李賀歌詩集序」の後半を、沈子明と杜牧の對話とみて、舊訓を考え直した。

宝塚一零參伝論。『花園大學研究紀要』創刊號 昭和四十五年五六三月 花園大學刊。李賀の奇と李賀の奇を比較する。

端公一李賀小記。『人文論叢』18 號 昭和四十五年六月。

幻の曉一山中智恵子夫人家集読後。『日本歌人』一九七〇夏號 昭和四十五年八月 日本歌人發行所刊。少し李賀にふれる。

雜記

一 李賀詩引得。長い間、李賀の詩を読みながら、わたしはその索引を作らなかつた。作ろうとしたわけではない。かれの詩を読みはじめたのは、出會うやいなやとりつかれてしまつたためで、向がなんだかさっぱりわからぬくせに、眺めていろだけで昂奮し、

あるいは沈鬱し、そして満足した。大學の卒業論文にかれを讐んだのも、ほかのものを読んで費す時間が惜しかつたまで。予想がはずれて敗戦まで生き残り、復員して帰ると、飢えた家族の糧をさがすのに忙しく、かれとの付きあいは行列に立ち、車をまつ、といったらぶれた時間にかかり、夜はしょっちゅう停電で、すき腹かかえ寝るよりほかにしようもなかつた。腹がへらなくなり停電がなくなつても、もし誰かが李賀について語りはじめいたら、わたしは自分でかれについて物を書くことなんぞしなかつたろう。七年间、わたしは首をのばして待つっていたのだ。しかし誰も何もいわない。わたしは向つ腹がたつてきた。やる奴がないのならおれがやってやる。おれの言い草が気にくわめなら手前がやつてみるがいい。感心するようなものを見せてくれたらおれはいつでも見物席におりる。中新敬が兼好法師について同じような氣持だったのと、昭和二十八年、ふたりで『方向』を創刊した。そうこうするうち変なめぐりあわせで大學の教師になつた。当人の恩恵にかかるなく、人は大學の教師を学者とよぶ。教師かなうすしも学者ではなく、学問するためにはそこから遠ざかる方がいいかもしないのが今の大學生の実情であるにしても、人さまから呼ばれる以上は、その實質に近づく努力はせねばならぬ。もはや、好きなものを好きな風にだけ読んでいるわけにいかなくなつた。索引のたぐいを中國では工具といふ。たしかに論文、大學の教師が書かねばならぬそれをつくる作業は工作といふにふさわしく、工作には道具がいる。わたしはできるだけ工場の流れ作業式の「研究」を敬遠し、わたしの信する読書法を頑固に守ってきた。年をとると肉体が衰え記憶力が急速に減退する。誰も知つてゐることだが、それ

がすぐ自分の上にも来るものとして予定に入れることを、わたしは迂闊にもしておかなかった。さきごろ零參について書いた文章のなかで、「花賀」「ことばは零參以前に用例を見ないと記し、以後にも知らぬと筆を走らせ、荒井謙氏から、李賀にありますと教えてられ、感謝し、かつ汗をかいたのであった。李賀のことばはみなわたしの胸に染みついているはずだつた。そのはずが外れてことばは鳥のように逃げる。時々作りかけては、それより読み返して記憶するにしへはなしと思ひ、草森紳一氏が李賀索引を作りつつあると聞いて、も、ぱらその完成を待ちくらしたが、それからもう三四年たつ。鳥ばかりか、花まで散る。人さまへの奉仕はとにかく、自分のためには網をあまねばならぬ。浅樽を見て縄をなうような仕事をすでに半自となつた頭をふりたててするののはわれながらおかしいが、とにかくやりますようと書いてくれる家人や二どもに勧めされ半分ほど仕事を進めた。数日まえ、本屋をのぞくと、なんと、李賀詩引得がすでに本となつて棚に並んでいるではないか。わたしはほつとして、一本をあがない、帰つて家人にみせたら、まあよかつたですわと、喜んでくれた。がつかりするのではないかと内心察していたが、これで二重にほつとし、だんだん禁しくなつて来た。索引つくりという仕事は多く、しかも完全を期待していく、つらい仕事である。ことに人さまに利用してもらうものとなれば、墨のうちかた一つにも神經を磨りへらす。わたしはこの引得を作られた人たちに深い尊敬と感謝をます挙げたい。そうして同じ仕事をやりかけた人間からみた感想や詩文を二、三のべておこう。父文庫編『李賀詩引得』一九六九年成文出版社刊は世界書局本に收める玉注本を底本にする。これは中華書局本と

一ジ立ても全く同じ王注本で、今日も「ども流布するものだらうから、すでにその本をもつ読者には利用しやすい索引といえる。しかし、李賀詩を突込んで精確に読もうとすると、王注本の本文は、あまりあてにならぬ。わたしが「李賀集の詩本」として掲げたものは、いまでは割合、見やすい本なのだから、まず對校本をつくってこれを索引のはじめにおき、各首、各句に番号を与え、異文も異文として注記し、索引のなかに組みじなば、どんなに役立つたことだらう。この引得はその勞を省いた。まことに惜しまれる。一人の人の作業ならば對校すら難事業だけれども、數人の訓練した助手をもつ機関ならば、大いに困難を減じるだらう。この底本選定の安易は、他の引得類にもしばしば見られることである。卷頭の轄經宗 (*Classification of His Poems*) に見える「沈之銘」は「沈子明」の誤りであろう。索引はまだこまかく一一に当つてはいないが 212 頁、轄の項の「小羅過○峰 35-10」の〇は本文は轄でなく鑑である。従つてこの一行は削るべきだ。214 頁、轄の項「○如如茶夢」の上の如は心でなければならぬ、同じ轄、轄の項の「邊○今朝憶築」は蔡の後に筆がめけている。以後、気づくに從つてこの錯誤で訂正してゆくつもりだが、編者もまた正誤表をつくるか、刷を重ねるとき訂正されるとよい。

2 宋雪汀注李長吉詩 清の全祖望の『鷺鳴亭集』外編卷二十六に「宋雪汀注李長吉詩序」という文章除があつて、その終りに「わたしの友の宋雪汀が昌谷詩の注を著し、わたしに序文をつくるよう依頼したので、この文章を書き、手紙で、これを卷末につけてくれとたのんだ。雍正癸卯正月望日」と記す。日付は一七二三年。この注をやがしているが見かけない。宋氏についても未詳。

李長吉

はじめに

これは、わたしの龍谷大学文学部卒業論文である。

昭和十六年の夏休に執筆し、十一月二十三日に清書し終った。二十四日原本、二〇日、微兵検査通過書をつける。二十五日、文学部に提出した。文学部がこの論文の表紙には、たラベルでは127の番号が与えられ、十二月三日、支那学科主任教授の本田成之博士が、ついで福嶋俊翁教授（サインは福島と表記）が、審査されたようである。四日から十日まで単位学科の試験があり、十一・十二両日、微兵検査をつけ、直後に、第一乙種合格と告げられた。十七日、論文の口述試問があり前記二教授が質問された。たぶん二十五日に卒業式があった。わたしが出席しなかった。卒業の日付は十二月三十一日である。

昭和十七年二月一日、入営。昭和二十一年三月三日、台湾より復員歸郷。昭和三十年二月、龍谷大学から手許に持ちかえることを許された。幼稚な論文であるが、わたしにとっては、この種の制作の最初のものであり、またこれで書いた時代を思えば感なきことをえない。

昭和四十二年三月十六日

未熟な少年の「」の論文を一一に載せるのは、お読みくださる方には迷惑であろう。ただ、わたくしとしては『方向』に書いた李賀に関する記事は、この論文の注釈にすぎなかつた氣がするので、その「本文」を提出しておきたかったのである。「金銅仙人騎獣歌」を書いたときから、やや、「」の論文の外へ歩み出したようと思ふが、いずれにしてしまはれたる足どりで、いつまでたつても幼なさを脱しきれぬことである。

昭和四十六年一月二十一日

李長吉目次

- 序
- 第一章 李長吉の生涯
- 第二章 李長吉の藝術
- 結

序

一人の青年が文華の圓熟した中古の世に生れ、廿七年の短い生涯に於て何を寫したかを考へてみよう。

私はたゞ李長吉に就て語るばかりだけれど、これによつて當時の秀れた青年達が如何に感じ如

何に考へたかを知ることが出来よう、又彼ら青年の中にあつて如何なる點から彼が鬼才と稱ばれたかを知るだらう。様々の運命が如何に彼を左右したか。それらの運命に如何に處したか、其處から如何なるものを生み出したか、而して彼の生み出したものが如何なる意味を持つかを知ることが出来よう。

私達は彼の生きた時代から既に千年を隔て、ゐる。先人の努力はこの脇りを幾分限界縮めて、唐といふ一つの大きな時代の文華が種えられ、培まれ、花發き、滅んでいつたやまを勝先を望むが如くに觀せてくれる。けれども所詮千年の昔である。私達は凡てを知ることは出来ない。のみならず、私の非才は到底この秀れた詩人の片鱗を傳へるに足るまい。

ただ私は彼から藝術に携はる青年が生命を注いでなした遺産をうけとつてゐる。私はこれを幾分でも語り、又我々が如何に生るべきかを考へる範と在すのみである。

宋刻李賀集
金刻李賀集
王昌黎李賀歌詩編
黃陶菴評於二林批點李長吉集
吳汝綸李長吉詩評註
近人朱自清氏李賀年譜
清華學報十卷四期周
閻風氏詩人李賀

私の論文は之等先達の貴い努力に助けられて成るものである。

請說軒轅在時事、伶倫採竹二十四、伶倫以之正音律、軒轅以之調元氣、當時黃帝上天時、二十三管咸相隨、唯獨一管人聞吹、無德不能得此管、此管沈埋虞舜祠。昔引董誦

詩歌も言葉も嘗て巫祝が民の願いを天に放つた祈であり天の心を民に指す啓示であった。天に上つた軒轅が人間に留めた苦難を得て之を奏でるものが巫祝であつた。彼は傳統の保持者であり且諭言者でなければならぬ、太古の巫祝が民衆の指導者としてやがて王の位置を獲得したのは祈禱と啓示の力に依る。然しながら遠く始められた苦難を振り出して天の聲を人間に傳へる巫祝は自ら孤獨な運命を選擇するわけには行かない、何故なら德無きものはこの聲を聞き得ないのである。

歌詩之所以爲發憲、其旨甚遠、夫物情暢樂忽抑之感、吁而歎之大空、還會於風雲、降於水土、包養陶埴之器、樂之靈盡溢於樂、樂之所感激則由於音、音則見於詞、微於音者聖人察之、章於詞者賢人觀之、云云

周易之詩說

歌詩は之を察し之を異るべきものである。音聲や言葉が本有する靈性への醉酔なる信仰が政治と藝術の裡に看たのである。(聲音之道與政) 後政治家の功利主義の手が伸びたとき、藝術は深く無用に晦れたが、地上の目的を棄絶して嚴しく美の祭壇を齋く藝術家の祈にのみ示現する口ゴスの秘義を語るものであらう。

詩人は巫祝の後裔である。その出生の意義も悲劇的な運命も得難い苦難をめぐって涌き出づるのである。

李賀は長吉は唐の德宗貞元六年庚午西化せられた。宗室鄭王の後として河南府福昌縣昌谷に生れた。

注一 長吉は羣龍西云云と言ひ、又成紀人の語もあるので彼を流西の產と見た者もあるが、それは李氏が隴西に出でたることを示すもので、尾張が離騒の發端に己の祖父、又己の名のゆゑよしを説いた氣持に近いものがあつて、長吉をして隴西云云と書はしめたのであらう。且隴西は古來傑士奇才を出す土地と言はれることにも因縁があるのであらう。

長吉は羣昌谷を歌つてゐるが、洛陽に近く、女几山の麓、隋の福昌宮を陞へ、昌谷水の清冽に沿ひ、桑竹叢生して、風俗醇厚なこの土地は彼を生み彼を育てた。昌谷五月鶯細青繡平水、遙處相應疊綴絲愁墮地に始まる昌谷詩——まことに深い愁なくしては詠きえない詳密さを以て歌つてゐるこの詩の中に長吉詩の持つあらゆる色彩が反映してゐる。

父晉肅以後に講の事件によつて長吉を想む者がその名を利用した以外には聞える所無き人である。母鄭氏は長吉を歎するにと懨しく長吉も深く哀つてゐたらうしい。長吉の性格には母親に由やかされて育つた青年らしい我儘や感傷的なところがある。姉弟數人、南隱の李長吉小傳には長吉の妹の音葉として、絆妻、通置、長指爪云云とのへ、又裏面詩中には音うして曲髪だつたこれが見えてゐる。常に病弱であつたらしい。

貞元六年は李白の死後廿八年、杜甫の死後十九年目に當り、漫年齡達廿三、重病滅廿、元和十二であつた。

彼の詩才は早く發揮した。春歸昌谷に東壁方讀畫蝶身苦不早け汨余昔將不及今恐年歲之不無與